

2018年7月20日

西洋古典資料保存実務研修報告書

神戸大学附属図書館 資料整備グループ

目録担当 日吉 宏美

1. はじめに

2018年5月21日から6月1日までと6月11日から15日までの計15日間、一橋大学社会科学古典資料センター（以下「センター」とする）実施の西洋古典資料保存実務研修（以下「実務研修」とする）を受講する機会を得た。この研修は2016年度より3年間実施される『西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業』の一環であり、資料保存に関するネットワーク構築のための人材育成を目的としてセンター内の保存修復工房（以下「工房」とする）で行われている保存修復に関わる取り組みを研修生に対してご指導いただくものである。センターは西洋古典資料を管理する貴重書専門図書館であるため、工房で行われている内容は貴重図書に対する処置である。筆者は8人目の実務研修生として参加させていただいた。

筆者は過去にセンター主催の講習会に2回参加している。2014年の『西洋社会科学古典資料講習会』、2016年の『西洋古典資料保存講習会』である。これら2回の講習会は自館の西洋古典資料整備に大変有効であった。『西洋社会科学古典資料講習会』で教えていただいた西洋古典籍の目録作成方法を元に、手つかずであった自館の西洋古典籍の遡及入力作業を進め、現在所蔵資料の半数以上をNACSIS-CATに登録している。また、『西洋古典資料保存講習会』を参考に、貴重書庫内の整備をできる範囲で行ってきた。

その上で実務研修に参加した理由として、これまでの取り組みを発展させ、貴重図書を適切に永く管理するための方法について学びたい、資料保存の現場の経験や実践的な知識を取り入れたい、ということが挙げられる。

2. 研修内容

2.1 事前調査

2018年5月にセンター助教1名、工房スタッフ1名、附属図書館古典資料係の1名によって本学貴重書庫の事前調査が行われた。現状の問題点へのご指摘、清掃の足りない部分、状態が悪い資料への対応のアドバイスなど、具体的にご指摘いただき、大変ありがたかった。過去の講習会を参考にした貴重書庫の整備も、独自で行うには判断が難しい部分が出てきていたので、現場でご相談できるのは大変貴重な機会であった。同時に一般書庫内の状態の悪い資料についても見ていただき、適切なアドバイスをいただいた。

2.2 カリキュラム

今回、他の受講生に比べると3週間という大変短い期間にもかかわらず、事前アンケートでは当館の貴重図書や一般図書に関する懸案事項を数多く挙げ、問題解決のためのカリキュラムを組んでいただいた。当館には現在まだない貴重書庫の保存ポリシー作成を念頭に置いた貴重資料保存の講義、状態調査のカルテの記入方法、神戸大学に合わせた状態調査の項目策定などに多くの時間を割いていただいた。また、貴重図書と一般図書それぞれの修理方法や保革、大型貴重図書用の保存容器作成、カビが生じた資料への対策などもカリキュラムに組み込んでいただいた。今回からの試みということで相談や質疑応答の時間を設定していただいたり、附属図書館の利用証を発行していただくなど、より深く学べるよう配慮していただいた。

2.3 状態調査

今回の実務研修のメインのプログラムは、状態調査用のカルテを正確に記録し、自館に合ったカルテを作成することである。カルテに記入することによって、資料の状態が把握でき、必要な保存処置を行うことができる。工房ではカルテを記入すると同時に保存処置を行う。工房の設立当初から資料購入時の製本形態を保存するという方針で、基本的に製本構造に関わる修理は行っていない。「利用のための保存」が基本であり、全ての資料を閲覧可能な状態にするため、破損箇所には可能な範囲で可逆性のある修理を行っている。

そこで、カルテに記入する項目である、製本の構造や見返しの種類、紙の材質などについて製本や材料の歴史を踏まえて教えていただいた。また、劣化状態に合わせた保存処置の選択についても教えていただいた。

カルテ作成後、ファイルメーカーを使ったDBへ入力する作業を見学し、データの活用事例を教えていただいた。カルテのデータを集積することによって、書誌学的な資料になり、過去の保存処置についてすべて記録することができる。もし業者に対応を依頼すべき状態の資料が見つければ、すぐにリストを作成することができる。

最後の1週間で神戸大学用のカルテのフォーマットを作成し、自館で行う状態調査をイメージしながら記入や手直しを行った。このとき、他のカルテ作成者に製本構造などを正しく説明できるように非常に根気強く教えていただいた。この1週間がなければ本当に理解することはできなかったのではないかと思う。リンプ装のサンプル作成や見返しのサンプル作成、製本構造を見分けるチャートを作成していただいたりと、たくさんの工夫によって理解が進み、自館での説明が容易になった。本当に感謝している。



見返しのサンプル

2.4 保存処置

工房で行われている保存処置のうち、和紙と正麩糊によるページ修理、外れかけた花布の固定などを実習させていただいた。これらは自館でも取り入れたいと考えている処置で、対象資料も多い。

また、さまざまな保存容器を作成した。大型本用容器、ブックシュー、ソフトフォルダ、カイルラッパーなどである。これらは工房で長年工夫を重ねられた結果、表計算ソフトと型紙を使って短時間でオーダーメイドの保存容器を作成することができる。

事前アンケートとして、当館のサービス担当に修理に困っている資料を聞いたところ、一番問題になっているのは仮綴じや無線綴じなど、綴じがバラバラになった資料だということであった。そこで、一般図書への修理の応用として、本文に糊を用いない保存製本、平綴じに見返しを付けた板目製本、和紙で足を付けて開きをよくした平綴じ、鋸目を使った綴じなどの修理方法を教えていただいた。



和紙で固定された花布

2.5 低温処理

低温処理とは、資料を薄葉紙で包んでフリーザーバッグに入れ、約-40度で1週間冷凍庫に入れて虫損の原因である害虫を幼虫やさなぎ、卵も含めて駆除する方法である。カリキュラムではセンターで新たに受け入れる資料の低温処理の様子を見学させていただいた。当館では現在、和古書や漢籍の遡及入力対象資料を中心に低温処理を行っているが、過去に西洋古典籍を低温処理したことはなかった。状態調査でこれまで認識していなかった西洋古典籍の虫損を学び、当館も西洋古典籍の低温処理の必要性を感じた。工房では、いつ、どの資料を低温処理したかを全て記録しており、後から見ても誰でもわかるようになっている。この点もぜひ参考にしたい。

2.6 保存環境整備

2.6.1 害虫モニタリング調査

センターでは2007年度より新規購入本の一部に虫損が見つかったことをきっかけに害虫のモニタリング調査が行われている。今回、センターの書庫に1か月前に設置されたトラップを回収し、顕微鏡で害虫を調査する作業を実際に行った。トラップは3種類を毎年同じ場所に仕掛ける。見つかった害虫の写真を撮り、書庫内のどこに何がいたかが一目でわかる地図と表にして保存している。害虫の種類によってはカビを好むものもいるため、清掃の参考にもなる。また、害虫がどの時点までいなかったのかが記録できる。センターではシバンムシ以外は清掃で対応するとのことであった。当館では今年4月から貴重書庫の害虫モニタリング調査を業者に依頼して行っている。今回センターでの過去の調査結果を閲覧させていただき、改めて継続して調査することの重要性を

理解した。当館も、来年度以降も継続して調査したい、できれば調査対象館を拡大したいと考えている。

2.6.2 カビ対策について

当館の抱える問題の一つとして、過去にカビによって汚損した資料の処置を事前調査でご相談していたため、カビについての講義を追加していただいた。業者に相談した方が良いケースや、工房で行うクリーニングの具体的な手順、胞子によって広がらないように気を付けるコツ、他の図書館の事例などを教えていただいた。カビで資料が汚損されていたとしても、除菌されていれば閲覧することはできる。ただ汚損を取り除くのは漂白などの処理が必要になり、資料を傷める恐れがあるため、慎重な検討が必要である。

2.7 保革

当館の資料は一般図書、貴重図書ともにレッドロットを起こしたものが少なくないため、保革については高い関心を持っていた。2016年度の『西洋古典資料保存講習会』にてHPC溶液、保革油、アクリルポリマーによる保革作業を教わったが、保革作業が可能な資料を見分けることができず、その後も保革作業を行っていなかった。特に貴重図書は中性紙のブックカバーを掛けるのみにとどめていた。

このたび、事前調査時に工房でもHPC溶液塗布を始めとした保革作業を一時中断していると聞きし、驚きを持って研修に臨んだ。

過去の研修で行われた実験結果である、和書の背表紙に使われている薄い革にHPCや保革油などを何パターンか塗り重ねたサンプルを見せていただくと、確かに慎重にするべき理由がわかったように思った。保革剤の種類や量によって、色や革の耐久性が大きく変化しており、影響は一目瞭然だった。

また、保革油を塗った後に掛けられたジャケットのpHを調査した結果も見せていただいた。保革油塗布後のジャケットは紙の種類や経過年数によって少し変色しており、HPCのみ塗布したジャケットと比較すると酸化の影響がみられる。変色したジャケットは二次被害の懸念があるが、ジャケットをかけることによって保革による酸性の成分が吸収できており、変色したジャケットを新しいものと交換することによって解消されると考えられる。

また、附属図書館の一般書庫内でHPCを塗ることができるもの、できないものを数多く見せていただき、自分



保革油などを塗り重ねたサンプル

なりにある程度判断できるようになった。レッドロットを起こしていても、銀面が残っていて革として健康なものはHPC塗布を行うことができそうだが、革がうろこ状に壊れているものや、戦前の日本の革装本など、見るからに革が薄くて弱っているものはジャケットでしのぐしかなさそうである。もちろん大丈夫そうに見えるものも目立たない場所で試す必要がある。また、保革油などを塗っていないくても、クーターなどの修理による水分が影響して、背表紙の革が黒く炭化しているものがあった。結論としては「保革はどうかしたいものほど手を出さない方がよい」というご意見に納得した。もちろん保存処置と同様、一般図書と貴重図書は別に考える必要がある。当館の保革について、一般図書は保革剤を塗布したサンプルを作成してサービス担当と相談の上、今後の方針を決めようと考えている。また、貴重図書は積極的な意味で、保革油などを用いず、これまで通り中性紙のブックカバーで対応しようと思っている。

改めて過去に保革作業を行ったセンターの資料を見せていただくと、いずれも良い状態に保たれており、革装本の美しさにため息が出るほどである。これは状態がよい間に、適切な保革作業を行い、適切な保存状態を維持しているからに他ならない。まさに次世代への宝だと思った。

2.8 学内との連携

センターと一橋大学附属図書館の間では一般図書の修理について連携がとられていた。研修中も附属図書館資料の保存箱や虫損資料の低温処理について相談されていた。専門家が近くにいて、気軽に問い合わせをすることができるのはうらやましい環境である。

また、毎年附属図書館の新人研修として、工房スタッフが望ましい修理方法でのページ修理や背表紙修理の研修を行い、だれでも簡単な修理ができるようになることである。このように、新人研修で修理方法について学ぶというのは、間違った修理を広めないためにも、とても効率のよい方法だと思った。図書館の事務室の書架には修理の処置方法ごとに分けられた資料が並べられており、修理に対するハードルの低さを感じた。

2.9 慶應義塾大学三田メディアセンター見学

事前アンケートで希望した、慶應義塾大学三田メディアセンターの貴重書室を見学させていただいた。実務研修生であったスペシャルコレクション担当の倉持さんに業務内容や貴重書活用授業についての説明を受けた。その後図書館内や展示スペースを見学し、後半は倉持さんに実務研修の成果や業務についてお話を伺った。

慶應義塾大学では授業に積極的に貴重資料を活用している。貴重書活用授業が行われる貴重書室は、部屋の中央に大きな閲覧机（授業時は毛せんが敷かれる）があり、その周囲を職員が取り囲むように配置されている。授業では書誌学だけでなく、経済学の

授業でアダム・スミスの『道徳感情論』の初版本を輪読する、社会学で情報伝達の変化としてグーテンベルクのファクシミリ版を閲覧する、法科大学院の授業で『ローマ法大全』を利用する、などの事例があったとのことであった。これらの資料はスペシャルコレクション担当者の目が届く環境で、資料状態に問題がなければ実際に触ることができることが博物館との大きな違いである。この授業の運用に驚いたと同時に、学生たちに忘れられない体験を提供できるだろうと非常に感銘を受けた。

その後の倉持さんとの懇談は、18世紀の西洋古典籍の原装を維持した修復に出す時にカルテ作成の知識が役立ったことや、貴重書庫の特別清掃の話題など、興味深い内容ばかりで、あっという間のひと時であった。

3. 自館への取り組み

まずは自館の貴重図書の保存計画を作成する必要がある。当館にはこれまではっきりとした方針がないため、具体的な保存方針や環境整備計画を早急に作成して永続的に実行したい。

実務研修から戻ってすぐに、事前調査の指摘や、実務研修で学んだことのうち実践できる内容に着手した。例えば貴重書庫の定期的な清掃の実施である。これまでは年に1~2回程度しか行っていなかった清掃を月1回とした。開架整理日の一部の時間帯を当て、貴重書庫に関わることの多いサービス担当と目録担当の共同で開始した。また、屋内用マットと粘着マットの整備、本のゆがみを防ぐためブックエンドの加増、正しい利用を促すための利用者用掲示の作成、特に汚損のある資料のドライクリーニングなどを行った。

カルテ作成については、西洋古典籍目録の担当者2名と定期的な勉強会を始めている。いずれは目録を作成しながら状態調査のカルテを作成し、データを蓄積していきたいと考えている。

4. おわりに

この研修を通して、センター内の保存修復工房で23年間行われてきた西洋古典籍の保存活動を学ぶことができたのは、大変貴重な経験であった。また、今後も資料保存に関して、いつでも相談できる場所ができたことがとてもありがたく心強い。一橋大学とは貴重図書の量は大きく違うが、分野的に共通する資料が多い。これまで蓄積されてきた知見を積極的に取り入れて、自館の貴重図書の保存に活かしていきたい。

5. 謝辞

最後に、本研修の実施にあたりご指導を賜りました一橋大学社会科学古典資料センターのみなさま、参加にあたり大変お世話になりました一橋大学附属図書館のみなさまに心より御礼申し上げます。